スポーツの国際大会とウェブ上のレイシズム：
2014FIFAワールドカップブラジルに関する日本のウェブコメントに着目して[†]

河 野 洋* 北 村 薫**

**International Sporting Events and Racism on the Web:
A Study on Japanese Web Comments Regarding the
2014 FIFA World Cup in Brazil[†]**

Yoh KOHNO* and Kaoru KITAMURA**

Abstract

This study cites “casual racism” as it is suggested in the slogan “Racism. It Stops With Me” and aims to identify the characteristics of racism on Japanese websites that deal with international sporting events. With respect to the 2014 FIFA World Cup, about 670,000 web comments related to “Yahoo! JAPAN” news on the World Cup were collected. Of the comments, 16,236 were sampled, and the 289 comments that included “race-related words” were selected, classified, and evaluated into three types, depending on whether the content was discriminatory. In the analysis, the proportion of discriminatory comments was compared to all comments, and this was compared with year-round sports comments in Japan.

The results of the analysis showed that approximately 40.1 percent of the 289 comments were discriminatory about people of a different race. There were a particularly large number of comments about Koreans. Discriminatory comments about Chinese and Croatians also appeared although Croatians are rarely discussed in Japan.

The examination of the comments revealed the following characteristics: 1) Among the comments that were analyzed, the proportion of racially discriminatory comments that were only mentioned at the World Cup was low, at 12.9 percent. This suggests that international competitions are not a direct cause of racism on the web. 2) Discriminatory comments against Croatians arose from the criticisms by the Croatian national team against the Japanese referee of a match played by their country. Therefore, these comments were transient, although this type of casual racism is likely to occur repeatedly in international competitions targeting different racial groups. 3) Racism toward Chinese and Koreans is one of Japan’s social problems. However, while this racism is considered to be serious, a part of the discriminatory web comments displayed the kind of casualness that is characteristic of casual racism.

Key words : Anti-racism, Casual Racism, Internet, Social Media

[†] 原稿受付 2016年11月1日 原稿受諾 2017年1月16日

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台1-1

** 順天堂大学国際教養学部 〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1

* Graduate School of Health and Sport Science, Juntendo University, 1-1, Hiragakuendai, Inzai, Chiba, Japan (270-1695)

** Faculty of International Liberal Arts, Juntendo University, 2-1-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, Japan (113-8421)

1. 緒 言

1.1 ウェブ社会に求められるアンチレイシズム・ムーブメント

2015年11月、Jリーグに所属する黒人選手に対し、マイクロブログのツイッター上で人種差別的な書き込みがなされ、最終的に投稿者である高校生が謝罪する出来事があった（注1）。2016年6月にも別の黒人選手に対して同様の投稿があり（注2）、スポーツ選手がウェブ上でレイシズムの被害に合う事例が起きている。今日、ウェブ上では試合結果や選手の動向などスポーツに関する大量の情報が交わされ、それらに対し人々は自身の意見や感想などをウェブコメントの形式で投稿している。しかし、先述のような公となったものに限らず、スポーツに関するウェブコメントの中にはレイシズムを想起させるものが少なからず存在している。その実態については、Farrington et al.¹⁾やCleland²⁾、河野・北村³⁾などによって報告がなされている。

アンチレイシズムの理念を掲げるスポーツは、レイシズムの根絶に向けた様々なキャンペーンを展開してきた。その際、King⁴⁾のいうように、スポーツが最も重要な課題としてきたのはスタジアムやフィールド上からのレイシズムの根絶であった。その取り組みは、イギリスのサッカースタジアムでの人種差別的行為による逮捕者の減少（注3）など、一定の成果を収めてきている。一方で、先述のようなウェブ上のレイシズムに対し、スポーツは自身の新たな課題として取り組むことを求められている。Kilvington⁵⁾は、スポーツからのレイシズムの根絶がウェブからのレイシズムの根絶でもあるとしている。ウェブが発達した今日の社会で、スポーツのアンチレイシズム・ムーブメントは何を問題とし、どのようなキャンペーンを展開していくべきかを再考する時期にあるといえる。

1.2 「カジュアルレイシズム」への視点

レイシズムとは本来、人種意識や人種関係に基づく差別や偏見を指す。それらの意識や関係は歴史的・文化的・政治的文脈の中で生じるものであり、レイシズムは偶然起こり得るものではなく、人種主義的信念に基づく明確な差別の意思があると考えられる。一方、オーストラリアのアンチレイシズム・キャンペーンである“Racism. It Stops With Me”（注4）（以下、“RISWM”とする）は自身が取り組む問題について、それら本来の意味でのレイシズムの他に、「カジュアルレイシズム」の考えを用いて説明している。カジュアルレイシズムはレイシズムの形式のひとつであり、異なる人種に対するネガティブな固定観念や偏見に基づく行為である点は従来のレイシズムへの認識と変わらない。ただし、信念や思想を背景とする故意の差別的行為とみなされた本来のレイシズムに対し、カジュアルレイシズムは必ずしもそれらを特徴とせず、大抵は攻撃や危害を加えることを意図していないとされる。

RISWMの問題意識のひとつは、本来のレイシズムばかりが議論され、カジュアルレイシズムが軽んじられる傾向にあり、結果的にそれらの差別的行為を増長させていることについてである。このような状況は、ウェブ空間で顕著にみられるものといえる。一部のコメントが差別的な内容だと認識されつつ、それらを仕方ないものとして看過した結果、ウェブ上のレイシズムは珍しいものではなくなった。これまでスポーツがスタジアムで取り組んできたのは、本来の意味でのレイシズムに対してであった。一方、ウェブを視野に入れたアンチレイシズム・ムーブメントは、本来のレイシズムと同等にカジュアルレイシズムの根絶に取り組むことが求められる。

1.3 スポーツ領域におけるレイシズム研究の関心

特にスポーツ社会学の領域において、レイシズムは主要な研究テーマのひとつとされてき

た。そこでの関心のひとつは、レイシズムという社会問題をスポーツという現場を通じて観察することであった。黒人アスリートに着目したMartin⁶⁾のように、スポーツ領域のレイシズム研究は、社会で認知されているレイシズムがスポーツでどのように顕在化しているかを詳細に報告してきた。また、研究の中にはスポーツでのレイシズムを単に社会問題の延長とせず、レイシズムに関するスポーツ独自の傾向や課題を検討したものがある。Kahn⁷⁾はチームスポーツで特定のポジションが白人だけに与えられる状況を、スポーツ独自のレイシズムの形式として報告している。このような研究では、スポーツに関する専門的な知見が重要とされる。

スポーツ領域におけるレイシズム研究の関心として、スポーツという活動とレイシズムとの関係性についてが挙げられる。この関心の対象となるのはオリンピックをはじめとするスポーツの国際大会であり、これらの大会はスポーツの枠を超え、社会全体から特別な視線を向けられている。Edgecomb⁸⁾は1936年のベルリンオリンピックを取り上げ、スポーツとレイシズムとの負の関係について検討している。一方、Arishita⁹⁾は1995年のラグビーワールドカップにおける「スプリングボックス」の事例などに触れ、スポーツがレイシズムの根絶に向けたポジティブな力を持っていると主張している。このスポーツとレイシズムとの相反するふたつの関係性は、今日の国際大会でも同様に認められている。その上で、国際大会というイベントが社会に与える影響を、マスメディアの報道や世論の変化だけでなく、ウェブ上の記事やウェブコメントについても検証することが求められる。

1.4 スポーツに関する日本のウェブコメントとレイシズムの現状

河野・北村³⁾は日本のウェブを対象に、スポーツに関するコメントとレイシズムの現状について調査を行っている。2014年度に国内のウェブサイトで配信されたスポーツニュースに対する人々のコメントを収集し、それらの中にレイシ

ズムと認められる書き込みがどの程度みられるかを確認した。調査の結果として、収集されたコメントの中に異なる人種への差別的な書き込みが一定数存在したこと、特に「韓国人」と「朝鮮人」に対する差別的なコメントが多くみられたことなどが報告されている。

河野・北村³⁾はスポーツに関する日本のウェブコメントにみられる差別的な書き込みに、日本社会に潜むレイシズムの反映としての認識を持っている。一方で、政治に関するコメントとの比較において、スポーツに関するウェブコメントにはレイシズムについて独自の傾向がみられるとしており、スポーツというテーマとウェブ上のレイシズムとの間になんらかの関係性が生じていることが示唆されている。ただし、これらの主張を検証するにはウェブ上のレイシズムに関する多くの知見が必要だとしており、スポーツ領域からの継続的な調査が求められる。

1.5 本研究の関心と目的

本研究は、ウェブ上のレイシズムに関するスポーツ領域からの基礎研究となる。ウェブに着目する上で、本研究は従来のレイシズム研究が課題としてきた本来のレイシズムでなく、カジュアルレイシズムに対する問題意識を持つ。本来のレイシズムは個人の尊厳や人命を犯す危険なものであるが、カジュアルレイシズムはそのような問題の深刻さを矮小化し、レイシズムを身近なものとする点が問題視される。冒頭に述べた事例のように、決してレイシストでない人々がその言動の意味を理解しないまま人種差別的な投稿を行っているところに、ウェブにおけるカジュアルレイシズムの課題を見て取ることができる。

また、本研究ではスポーツの国際大会とウェブ上のレイシズムとの関係に着目する。先述の通り、国際大会はレイシズム研究の重要な対象であり、国際大会に関するウェブコメントについての情報は今後のスポーツやアンチレイシズム・ムーブメントの在り方を検討する際の有益な知見になると考えられる。また、河野・北村³⁾

の調査した通年のウェブコメントのレイシズムは、日本での日常的なスポーツ享受の中で生じるものといえる。それに対し、日常を離れてスポーツの文脈の影響をより強く受ける国際大会に焦点を当てることで、ウェブ上のレイシズムに関するスポーツの独自性が明らかにされたと考えた。なお、本研究では国際大会に関するウェブコメントとして、2014年にブラジルで開催されたFIFAワールドカップに関するコメントに着目した。国際大会の形式は多様であるが、4年に1回開催される非日常的なイベントであり、規模や知名度の点で世界最大級の大会であるFIFAワールドカップは、本研究での調査テーマとして妥当だと考えられる。

以上を踏まえ、本研究はスポーツの国際大会をテーマとする日本のウェブ空間におけるカジュアルレイシズムの特徴を明らかにすることを目的とした。

1. 6 用語の定義

1. 6. 1 人種

本研究では「人種」の語を、「日本人」と「日本人以外」とを区分する枠組みとして用いる。よって、その意味は身体的特徴に基づく本来の用法としての「人種」の他、「民族」「国籍」を包括する（注5）。

2. 方 法

2. 1 調査対象

本研究では調査対象を「Yahoo! JAPAN」（以下、「ヤフー」とする）の提供するサービス「Yahoo!ニュース」（以下、「Yニュース」とする）とした。Yニュースは、新聞・通信社の配信する記事から個人の書き手によるものまで、様々なニュースをウェブ上で配信するサービスである。Yニュースの特徴のひとつが、配信されたニュースに対してユーザがコメントを投稿できるサービスである。本研究は、このユーザによるコメントを調査データとして用いた。

2. 2 テーマの範囲設定

本研究は2014年に開催されたFIFAワールドカップに関するデータとして、大会期間に合わせてヤフーで公開された特設ページで配信されたニュースに対するコメントに着目した。特設ページではYニュースと同様の形式で、FIFAワールドカップに関するニュースが集約され配信された。また、通常Yニュースでは「スポーツ」というカテゴリを設けて配信を行っている。本研究はFIFAワールドカップに関するウェブコメントを分析する際の比較データとして、スポーツカテゴリで配信されたニュースへのコメントを用いることとした。

なお、本稿では便宜上、FIFAワールドカップの特設ページで配信されたニュースやそれに対するコメントを「ワールドカップデータ」とし、通常のスポーツカテゴリで配信されたものを「通常スポーツカテゴリデータ」とする。また、通常スポーツカテゴリデータの中にFIFAワールドカップに関するニュースやコメントは含まれていない。

2. 3 データの収集方法

データの収集期間は、ワールドカップデータの特設ページの公開期間である2014年5月1日から7月31日まで、通常スポーツカテゴリデータを2014年4月1日から2015年3月31日までとした。データの収集はウェブサーバで動作するプログラムを開発し、定期的に自動で収集を行った（注6）。コメント数を確保するため、配信から24時間を経過した記事のデータを随時収集した。

2. 4 分析用データセットの作成

データ収集作業によって、ワールドカップデータとして666,089件のコメントが集められた。ただし、コメントのデータサイズが非常に大きくなったため、以降の分析作業を考慮しコメントのランダムサンプリングを行い、データサイズを縮小した。サンプルサイズは誤差の最大値を0.01、信頼度係数を2.58、母比率を0.50と

表1 データ収集およびサンプリングの結果

	全体		データセット	
	ニュース数	コメント数	サンプル数	元のサイズに対する割合(%)
ワールドカップデータ	12,804	666,089	16,236	2.44
通常スポーツカテゴリデータ	5,315	1,596,985	16,470	1.03

表2 調査に関連する潜在的な危害やリスクのチェック

●個人, オンラインコミュニティ, 研究者および研究活動に対する潜在的な危害やリスクは何か

- ・個人: ウェブユーザの自由な言論活動への圧力
選手など, スポーツニュースの当事者に対する不当な非難
 - ・オンラインコミュニティ: Yニュースに対する不当な非難
 - ・研究者: ウェブ研究者に対する信用の低下
 - ・研究活動: 今後のウェブ研究活動の制限
- 上記はいずれも, 本研究が適切な配慮を怠った場合に生じる危害やリスクとなる

●リスクを最小限にするための手続きを行っているか

- 以下の手続きにより, 潜在的な危害やリスクを回避する
- ・コメントを書き込んだユーザ個人を批判しない
 - ・ニュースの当事者やニュースの内容について批評をしない
 - ・言論空間としてのYニュースについて批評をしない
 - ・調査後においてもその妥当性が検証できるよう, 調査方法を明記する

して計算した。サンプリングによって, 16,236件からなるデータセットが作成された。同様に, 通常スポーツカテゴリデータとして1,596,985件のコメントが収集され, サンプリングにより16,470件からなるデータセットが作成された。(表1)

2.5 調査に関する倫理的配慮

ウェブ研究倫理のガイドライン策定に取り組む“Association of Internet Researchers”の“Ethical decision-making and Internet research 2.0”(注7)には, プロジェクトの過程で問われる事項のひとつとして, 調査に関連する潜在的な危害やリスクが挙げられている。本研究では同項に記載されたチェックリストに基づき, 調査における潜在的な危害やリスクとそれらを最小限にするための手続きについて整理した。(表2)

人権に関する条約として, 「あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約」(注8)が

ある。人種問題を扱う本研究にとって, 当条約は研究倫理の原理となるものである。当条約第4条には, 人種主義的思想や人種差別の流布や扇動の禁止が明記されている。本研究には, 研究自体が人種差別を助長・強化するものとならないための配慮が求められる。そこで本研究は, ①ウェブ上のレイシズムに関して特定の人種を非難せず, ②差別的行為の正当性を議論せず, ③調査で認められた差別的行為を研究者の判断で排除しないこととした。

Yニュースの二次利用および著作権について, 同サービスのヘルプ(注9)を参照した。情報の二次利用には, 情報提供元の許可や記事のURLを明記することなどが求められる。ただし, Yニュースの記事は一定期間で閲覧不可となるため, 本研究ではYニュースの記事の全文または一部を論文中に転載せず, トピックの周知を要する際は他のニュース配信サービスの記事を参照することとした。

本研究で特筆すべき事項として、Griggs¹⁰⁾やCleland²⁾が述べる、ウェブコメントを原文のまま引用することについての議論がある。論文中でのコメントの引用はウェブの実状を理解する上で有用であるが、Cleland²⁾は電子掲示板のユーザにインフォームド・コンセントを想定した調査の説明を行うなど、コメントの引用には適切な配慮が求められる。ただし、本研究は大量のデータによる定量的分析を行うものであり、データの質的な利用は計画段階から主の目的としなかった。よって、本研究では収集したデータを統計的に処理し、コメントを原文のまま引用しないこととした。

2.6 分析1：人種に関する語の抽出

収集されたデータから本研究で分析対象とするコメントを選別するため、はじめに全コメントの本文から「人種に関する語」を抽出した。本研究では、次のふたつを人種に関する語として定義した。

I：「〇〇人」の形式

河野・北村³⁾と同じく、コメントの中から「〇〇人」の形式に該当する語を抽出し、研究の趣旨に沿って選定したものを人種に関する語として用いた。

II：蔑称

はじめに、「人種」「蔑称」「差別用語」などをキーワードとしてウェブを検索し、ネットスラングを含め人種に対する蔑称とされる語を収集した。この作業で、28種からなる蔑称の一覧が作成された。その後、それらの語をコメント内で検索し、出現が確認されたものを人種に関する語として改めて一覧化した。(表3)

人種に関する語を定義した後、それらを含むコメントを選別し、本研究の分析で用いるコメントのデータセットを作成した。なお、コメントデータのテキスト処理にはフリーソフトの「KH Coder」(注10)を用いた。

表3 蔑称一覧

蔑称	対応する人種
アメ公	アメリカ人, 米人
イエローモンキー	アジア人, 亜細亜人, 黄色人種
イタ公 [†]	イタリア人
キムチ	韓国人
クロ [†]	黒人
クロンボ ^{††}	黒人
くろんぼ [†]	黒人
サンボ	黒人
シナ	中国人
チャンコロ	中国人
チョン	朝鮮人
ニガー	黒人
ニグロ [†]	黒人
ポコベン [†]	中国人
ロスケ	ロシア人
下朝鮮人 ^{†††††}	韓国人
鬼畜米英 ^{††††}	アメリカ人, イギリス人, 英国人, 米人
紅毛	白人
黒んぼ ^{†††}	黒人
黒ん坊	黒人
黒奴	黒人
三国人 ^{†††}	韓国人, 中国人, 朝鮮人
支那	中国人
鮮人 [†]	朝鮮人
南朝鮮人 ^{†††††††}	韓国人
半島人 [†]	朝鮮人
毛唐	欧米人, 西洋人, 白人
露助	ロシア人

蔑称の出典は以下の通り

[†]：「放送禁止用語集」(<http://www.geocities.co.jp/WallStreet/4845/odio/kinku.html>)

^{††}：「侮蔑 - Wikipedia」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/侮蔑>)

^{†††}：「放送禁止用語一覧」(<http://monoroch.net/kinshi/>)

^{††††}：「鬼畜 - Wikipedia」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/鬼畜>)

^{†††††}：「下朝鮮とは？」(<http://www.weblio.jp/content/下朝鮮>)

^{††††††}：「大韓民国 - Wikipedia」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/大韓民国>)

(無印)：「差別用語 - Wikipedia」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/差別用語>)

2.7 分析2：レイシズムへの視点によるコメント内容の評価

対象となったコメントについて、本研究の関心であるウェブ上のレイシズムへの視点からコメント内容の評価を行った。コメントへの最終的な評価は、それがレイシズムと認められる「差別的なコメント」かどうかを判定することにある。本研究では、コメント内容が次の3つの形式に該当するものを差別的なコメントとした。

I：攻撃的なコメント

相手に対する怒りや非難を表すコメント。以下のような、明確な差別表現を含む。

- a) 直接的な侮蔑(「糞」「屑」「愚か」「異常」「底辺」など)
- b) ネガティブな感情表現(「嫌い」「不愉快」「最悪」など)
- c) 相手を敵視する語(「国交断絶」「抗議」「攻撃」「排除」など)
- d) 命令調の行動(「くたばれ」「消えろ」「追い出せ」など)

II：嘲笑的なコメント

冷やかし、嫌味、呆れなど、相手を「ネタ」にするコメント。「バカ」や「マヌケ」などの侮蔑的な表現や相手を見下す内容を含んでいても、危害を加えるような思想的・感情的なものとならない。また、以下のような表現を含む。

- a) 笑いを表す記号やネットスラング(「(笑)」「w」など)
- b) ポジティブな表現による皮肉(相手の不幸や失敗に対する「○○人おめでとう」「さすが○○人」などのコメント)

III：差別的なステレオタイプ

「○○人って本当に馬鹿だな」といった主張が、「○○人って△△人と大して変わらないな」などと表現される場合がある。このコメントで侮蔑の対象となっているのは前者の人種だが、それは後者の人種に対する差別的なステレオタイプの存在によって成立している。このようなステレオタイプを、本研究は後者の人種に対する侮蔑として評価した。

対象となったコメントについて、筆者1名が

内容を1件ずつ確認し分類を行った。3つの形式のいずれにも該当しないコメントは、差別的でない「中立的なコメント」とした(注11)。

コメント内容の評価結果については、ワールドカップデータおよび通常スポーツカテゴリデータの各々で集計を行い、全体および人種に関する語ごとの内訳を示した。その際、「イギリス人」と「英国人」のように、同じ人種を示すカタカナ表記と漢字表記はひとつにまとめて集計した(注12)。

2.8 分析3：ワールドカップデータと通常スポーツカテゴリデータとの比較

評価結果を集計した後、ワールドカップデータと通常スポーツカテゴリデータとの間で差別的なコメントの割合を比較した。比較は各データ全体のコメント評価結果についてカイ二乗検定を行った。有意水準は5パーセントとした。

2.9 分析4：ワールドカップデータでのみ出現した人種へのコメント内容の評価

ワールドカップデータで出現した人種に関する語は、ワールドカップデータでのみ出現した語と、通常スポーツカテゴリデータでも出現した語のいずれかに分類される。後者は日本のスポーツで日常的に話題となる人種といえるが、結果のひとつとして、それら人種に関する語の種類ごとにワールドカップデータのコメント評価結果を再集計したものを示した。

3. 結果

3.1 分析1：人種に関する語の抽出

ワールドカップデータおよび通常スポーツカテゴリデータの分析用データセットから、57種の人種に関する語が抽出された。そのうち、「○○人」の形式に該当した語が47種あった。また、人種に対する蔑称として10種の語の出現が確認された。(表4)

表4 人種に関する語

「〇〇人」の形式				蔑称
アジア人	クロアチア人	ヨーロッパ人	西洋人	アメ公
アフリカ人	ケニア人	ロシア人	台湾人	イタ公
アメリカ人	コロンビア人	亜細亜人	中国人	キムチ
アラブ人	スペイン人	英国人	中東人	シナ
アルゼンチン人	タイ人	欧州人	朝鮮人	チョン
イギリス人	ドイツ人	欧米人	東ドイツ人	ロスケ
イタリア人	フィリピン人	黄色人(種)	東洋人	下朝鮮人
イラン人	ブラジル人	外国人	南米人	鮮人
インド人	フランス人	外人	白人	南朝鮮人
オーストラリア人	ポルトガル人	韓国人	米人	半島人
オランダ人	メキシコ人	豪州人	有色人(種)	
ギリシャ人	モンゴル人	黒人		

3.2 分析2：レイシズムへの視点によるコメント内容の評価

ワールドカップデータでは、人種に関する語を含む延べ289件のコメントが分析対象となった。コメント内容を分類した結果、約40.1パーセントにあたる116件が差別的なコメントとして評価された。人種に関する語ごとの内訳については、差別的なコメント全体($\mu = 3.41$, $\sigma = 9.45$)の中で、「韓国人」($n = 45$, $z = 4.402$, $p < 0.01$)と「朝鮮人」($n = 35$, $z = 3.344$, $p < 0.01$)に対する投稿が有意に多かった。その他、「ドイツ人」「中国人」「クロアチア人」への差別的なコメントが一定数みられた。(表5)

3.3 分析3：ワールドカップデータと通常スポーツカテゴリデータとの比較

比較データである通常スポーツカテゴリデータについては延べ312件のコメントが対象となり、内容の評価を行った結果、約40.4パーセントにあたる126件が差別的なコメントとされた。検定の結果、 $\chi^2(1, N = 601) = 0.004$ となり、データ間に有意な違いはみられなかった。(表6)(表7)

3.4 分析4：ワールドカップデータでのみ出現した人種へのコメント内容の評価

ワールドカップデータのコメント評価結果のうち、ワールドカップデータでのみ出現した人種への差別的なコメントの割合は約12.9パーセントであった。また、通常スポーツカテゴリデータでも出現した人種への差別的なコメントの割合は約47.6パーセントであった。(表8)

4. 考察

4.1 国際大会はウェブ上のカジュアルレイシズムを増加させるか

本研究の調査において、先行研究で述べられていたような国際大会とレイシズムとの関係性が、ウェブ上のカジュアルレイシズムに対しても表れることが予想された。しかし、今回の調査ではワールドカップデータと通常スポーツカテゴリデータとの間で差別的なコメントの割合に違いがみられず、国際大会とウェブ上のカジュアルレイシズムとの独自の関係性は確認されなかった。

ワールドカップデータのコメント評価結果を人種に関する語の種類ごとに再集計すると、ワールドカップデータでのみ出現した人種に対する差別的なコメントの割合は約12.9パーセン

表5 コメント内容の評価結果 (ワールドカップデータ)

人種に関する語 (蔑称)	コメント数			(A) 差別的な コメント	(B) 中立的な コメント	(C) 合計	(A) の割合	(A) のz得点
	攻撃的	嘲笑的	ステレオタイプ					
ワールド カップ データ でのみ 出現		1		1		1	1	-0.255
					1	1	0	-0.361
					2	2	0	-0.361
					4	4	0	-0.361
					2	2	0	-0.361
	1	3		4	1	5	0.800	0.062
					2	2	0	-0.361
					1	1	0	-0.361
		1		1	24	25	0.040	-0.255
					2	2	0	-0.361
		1		1	5	6	0.167	-0.255
		1		1	4	5	0.200	-0.255
					1	1	0	-0.361
					1	1	0	-0.361
					2	2	0	-0.361
通常ス ポーツ カテ ゴリ デー タで も出 現					2	2	0	-0.361
					7	7	0	-0.361
		1		1	1	2	0.500	-0.255
					1	1	0	-0.361
					1	1	0	-0.361
	2	1		3	13	16	0.188	-0.044
		(1)						
	1			1	4	5	0.200	-0.255
	6	3		9	17	26	0.346	0.592
		1		1		1	1	-0.255
		(1)						
					1	1	0	-0.361
					1	1	0	-0.361
			1	1	33	34	0.029	-0.255
	2	1	1	4	11	15	0.267	0.062
	8	32	5	45	11	56	0.804	4.402**
	(1)	(11)	(2)					
		(1)						
	(1)	(1)						
					7	7	0	-0.361
	2	3	2	7		7	1	0.380
	(2)	(1)						
	7	21	7	35	4	39	0.897	3.344**
	(2)	(8)	(1)					
		(1)			(1)			
		(3)						
					2	2	0	-0.361
	1			1	5	6	0.167	-0.255
	合計	30	70	16	116	173	289	0.401

** : $p < 0.01$

トとなり、ワールドカップデータと通常スポーツカテゴリデータの両方で出現した人種への差別的なコメントの割合（約47.6パーセント）を大きく下回った。国際大会では、普段なら関わ

りのない人種との間にスポーツを通じた関係が生じる。国別対抗戦の形式の中で、そのような関係が相手への攻撃的・排他的な姿勢になるとすれば、国際大会はウェブ上のレイシズムを生

表6 コメント内容の評価結果 (通常スポーツカテゴリデータ)

人種に関する語 (蔑称)	コメント数			(A) 差別的な コメント	(B) 中立的な コメント	(C) 合計	(A) の割合	(A) のz得点
	攻撃的	嘲笑的	ステレオタイプ					
アジア人 [亜細亜人]		1		1	9	10	0.100	-0.320
アフリカ人					1	1	0	-0.407
アメリカ人 [米人] (アメ公)		4 (1)		4	7	11	0.364	-0.058
イギリス人 [英国人]	1			1	2	3	0.333	-0.320
イタリア人					3	3	0	-0.407
イラン人	1			1		1	1	-0.320
インド人					1	1	0	-0.407
ケニア人					1	1	0	-0.407
スペイン人					1	1	0	-0.407
ドイツ人					3	3	0	-0.407
フィリピン人					1	1	0	-0.407
ポルトガル人					1	1	0	-0.407
モンゴル人		4		4	10	14	0.286	-0.058
ロシア人					3	3	0	-0.407
欧米人					2	2	0	-0.407
黄色人種					3	3	0	-0.407
外国人	2	3	1	6	62	68	0.088	0.116
外人	4	3		7	23	30	0.233	0.203
韓国人 (キムチ) (南朝鮮人)	25 (3) (2)	21 (4)	8	54	21	75	0.720	4.302**
豪州人		1		1		1	1	-0.320
黒人		1		1	5	6	0.167	-0.320
台湾人					1	1	0	-0.407
中国人 (シナ)	5 (1)	9 (1)		14	9	23	0.609	0.814
中東人					1	1	0	-0.407
朝鮮人 (チョン) (半島人)	6 (1) (1)	19 (5)	5 (2) (1)	30	6 (1)	36	0.833	2.209*
東洋人					2	2	0	-0.407
白人	1	1		2	8	10	0.200	-0.233
合計	45	67	14	126	186	312	0.404	

*: p < 0.05 / **: p < 0.01

表7 コメント評価結果のデータ間比較

		コメント数		
		差別的	中立的	合計
ワールドカップデータ	n	116	173	289
	%	40.1	59.9	
通常スポーツカテゴリデータ	n	126	186	312
	%	40.4	59.6	

$$\chi^2 (1, N = 601) = 0.004, \text{ n.s.}$$

表8 人種に関する語の種類ごとのコメント評価結果 (ワールドカップデータ)

人種に関する語の種類	コメント数			(A) の割合
	(A) 差別的	(B) 中立的	(C) 合計	
ワールドカップデータでのみ出現	8	54	62	0.129
通常スポーツカテゴリデータでも出現	108	119	227	0.476

じさせる直接の原因となるであろう。しかし、本研究の調査ではワールドカップデータでのみ出現した人種に対するコメントの大半が中立的なものであった。この点において、国際大会はウェブ上のカジュアルレイシズムを生じさせる直接の原因にならないと考えられる。

4.2 一過性のコメントにみるレイシズム問題の所在

スポーツの国際大会は、国と国との間に独自の関係をもたらす。対戦国であったり、大会の開催国や優勝国との関係などがそれである。このような関係がナショナリズムとレイシズムとを親和させ、差別的なコメントを生じさせる原因となる可能性は否定できない。しかし、今回の調査で対戦国や開催国の人々への差別的なコメントはほとんどみられなかった(注13)。優勝国のドイツ人に対しては差別的なコメントが一定数みられたが、それらの大半は優勝報告会でドイツ人選手による人種差別的な行為があったとするニュースに対するコメントであった(注14)。この出来事はウェブ上のカジュアルレイシズムを考える上で検討すべき話題であるが、本稿ではドイツ人への差別的なコメントの直接的な原因が日本人のナショナリズムでない点を確認するに留める。

今回の結果で1点注目されるのが、「クロアチア人」に対するコメントである。クロアチア人は、通常スポーツカテゴリデータでは語の出現がなかった。ワールドカップデータでのみ出現した人種に対する差別的なコメントが少ない中で、クロアチア人へのコメントは半数以上が差別的な内容となっている。クロアチア人に対するコメントの発端は、クロアチアがブラジルと対戦した試合で日本人審判の判定に異議が出たことであった。この出来事はウェブ上でも話題となり、当初は審判の判定が正しかったかどうかについてコメントが交わされていた。しかし、試合後にクロアチア代表の監督や選手が審判を批判したニュースが配信されると、クロアチア人に対する差別的なコメントがみられるよ

うになる(注15)。その内容は、判定について相手を論破する類のものではなく、「クロアチア人は頭が悪い」という単純な侮蔑や、「日本の試合の審判がクロアチア人になりませんように」といった嫌味などである。

今日、クロアチアと日本との間に社会問題とされるような人種関係は認められていない。そのため、クロアチア人へのコメントは本来のレイシズムと異なるものとして理解できる。一方、歴史的・文化的・政治的な人種関係や人種主義的思想を必ずしも根拠としないカジュアルレイシズムの視点は、異なる人種に対する差別的なコメントの存在自体を課題として認めるものである。よって、クロアチア人へのコメントはカジュアルレイシズムとして認識されるものとなる。

クロアチア人に対する差別的なコメントについて、それがワールドカップ期間中のひとつの出来事によって生じた、一過性のものであった点が特徴として挙げられる。この特徴はRISWMが指摘する、カジュアルレイシズムが看過され議論の対象とされてこなかった状況の認知に寄与するものと考えられる。しかし、クロアチア人への嫌悪は一時的であったものの、国際大会において今回と同様の出来事は今後も起こり得るものである。つまり、侮蔑の対象を変えながら、一過性のカジュアルレイシズムはスポーツをテーマとするウェブ空間で繰り返し生じることが予見される。特に、国際大会は日常的に想定できないような人種に対して差別的なコメントを生じさせる可能性を潜在的に持つものといえる。スポーツはウェブ上でみられる一過性の差別的なコメントを、カジュアルレイシズムに関する継続的な課題として認識する必要がある。

4.3 ウェブ上のレイシズムに対する複眼的視点

ワールドカップデータでも通常スポーツカテゴリデータにおいても、「韓国人」と「朝鮮人」に対する差別的なコメントが多くみられた。両

者については、蔑称の出現回数や別の人種に対する侮蔑で比喩的に用いられる点などにも特異な傾向を見て取れる。また、ワールドカップデータにおける「中国人」へのコメントは、そのすべてが差別的な内容と判定された。これらの人種に対する差別や偏見は、河野・北村³⁾のいうようにスポーツを超えて日本社会全体のレイシズムの課題として認識されるものである。

しかし、社会的に認識されたそれらのレイシズムも、ウェブ上ではまた異なる特徴がみられる。韓国人への差別的なコメントの内訳をみると、通常スポーツカテゴリデータでは攻撃的なコメントの数が嘲笑的なコメントを上回っている。2014年度に韓国人に対する多くのコメントをもたらしした出来事として、韓国のインチョンで開催されたアジア競技大会がある。大会に関するニュースが配信される中、一部の記事で大会運営を糾弾する内容が報じられ（注16）、これらに対するコメントとして「不正ばかりの韓国人に抗議しろ」「韓国人は国際大会に出てくるな」といった攻撃的な内容の投稿がなされた。一方、今回調査したコメントでは、攻撃的なコメントよりも嘲笑的なコメントが多い傾向にあった。韓国人に対しても、ワールドカップデータでは嘲笑的なコメントが多くみられる。たとえば、韓国代表チームの敗戦に「韓国人の下劣さが証明された」という冷やかしのコメントがなされ、ドイツとアルジェリアの試合で選手にレーザーポインターが当てられると（注17）、「これはアルジェリア系韓国人の仕業だ」といった冗談交じりのコメントが投稿された。

韓国人や朝鮮人、中国人に向けられる差別や偏見は、人種意識や人種関係に基づく本来のレイシズムである。それらのレイシズムには、社会問題とされるような深刻さが特徴として認められてきた。しかし、ウェブ上の差別的なコメントの一部には、本来のレイシズムとは異質の気軽さが表れている。つまり、社会問題となるような深刻なレイシズムに対しても、ウェブ空間ではカジュアルレイシズムの性格が認められることとなる。スポーツのアンチレイシズム・

ムーブメントにとって、これまでの本来のレイシズムに対する視点だけでなく、カジュアルレイシズムとの複眼的視点によって今日の人種問題を再認識することが今後におけるひとつの課題となるであろう。

5. ま と め

5.1 結論

本研究の目的はスポーツの国際大会をテーマとする日本のウェブ空間におけるカジュアルレイシズムの特徴を明らかにすることであった。2014年にYニュースで配信されたFIFAワールドカップ関連のニュースに対するウェブコメントの調査を行った結果、分析対象となった289件のコメントの約40.1パーセントが、異なる人種に対する差別的なコメントと評価された。特に、韓国人と朝鮮人への差別的なコメントが多かった。また、中国人や、日本では普段話題とされないクロアチア人に対しても差別的なコメントがみられた。

考察によって以下の特徴が明らかになった。①分析対象となったコメントのうち、ワールドカップでのみ話題となった人種に対する差別的なコメントの割合は約12.9パーセントと低く、国際大会はウェブ上のレイシズムを生じさせる直接の原因とならないことが示唆された。②クロアチア人に対する差別的なコメントは、クロアチア代表チームが自国の試合の審判をした日本人を批判したことによって生じた。よって、それらのコメントにはカジュアルレイシズムの特徴としての「一過性」が認められた。ただし、国際大会ではこのようなカジュアルレイシズムが今後も対象を変えながら繰り返して生じるものと考えられる。③韓国人や朝鮮人、中国人への差別や偏見は、日本の社会問題とされている。しかし、深刻な問題であるはずの本来のレイシズムであっても、一部のウェブコメントにはカジュアルレイシズムの持つ「気軽さ」が特徴として表れた。

5.2 研究の限界

2014年のFIFAワールドカップで、日本代表チームは1分2敗でグループリーグ敗退となった。本研究の調査は、このような大会結果の文脈の中で行われたものであることを前提としなければならない。国際大会における勝利や、2002年の日韓大会でのベスト16といった特異な条件下において、ウェブコメントの傾向は大きく変わることが予想される。また、単一の競技大会であるFIFAワールドカップは、サッカーの競技としての影響を強く反映するものと考えられる。異なる競技やオリンピックのような複数競技の大会については、改めて調査・検証を行う必要がある。

本研究が調査したYニュースは認知度が高く、サービスの規模や調査テーマの範囲を設定する上でも対象として有用であった。ただし、Yニュースについては、記事に対するコメントの内容やコメント機能自体への不満が少なからず存在し、ヤフーが健全な言論空間の創出に向けて多くの取り組みを行っている点を把握しておく必要がある(注18)。Yニュースに限らず、あるウェブサービスにおけるコメントは、サービス自体の持つバイアスの影響を受けていると考えられる。本研究ではそのような影響について検討しなかったが、SNSをはじめとする多様なウェブコメントのプラットフォームが存在する中で、今後は個々のサービスやサービスの形式とウェブコメントの傾向についても検証される必要がある。

(注1)『G大阪FWへの差別、SNSに書き込んだ生徒の通う高校が謝罪文発表』(フットボールチャンネル, online, 2015/11/30)などを参照。

(注2)『浦和サポーター名乗る男がSNSで人種差別的な投稿。カイオ、浦和が見解。Jリーグからクラブへの「処分なし」』(サッカーダイジェストWeb, online, 2016/6/12)などを参照。

(注3) Farrington et al.¹⁾p.1を参照。

(注4) <https://itstopswithme.humanrights.gov.au/>

(注5)「人種」と「民族」の定義を区別しない研究上の根拠については、高¹¹⁾p.134を参照。

(注6) ヤフーでは一部のサービスでウェブスクレイピングを禁止している。Yニュースのスクレイピングは明示的に禁止されていない。

(注7) <http://aoir.org/reports/ethics2.pdf>

(注8) http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinshu/conv_j.html

(注9) http://www.yahoo-help.jp/app/answers/detail/p/575/a_id/44388/

(注10) <http://khc.sourceforge.net/>

(注11) 筆者が1人で分類したのは、①前例のない研究のため、コメントの意味するところやネットスラングなどを最も理解できるのが筆者であったこと、②筆者1人で行うことで分類に一貫性が担保できること、の2点による。分類に当たっては、コメント一つひとつについて常に本文に記載したⅠ～Ⅲの分類基準に照らし合わせ、客観性を保つことを心掛けた。

(注12)「アジア人」と「亜細亜人」、「アメリカ人」と「米人」、「イギリス人」と「英国人」、「ヨーロッパ人」と「欧州人」がそれぞれひとつにまとめられた。

(注13) 2014年のFIFAワールドカップにおける日本の対戦国は、コートジボワール、ギリシャ、コロンビアであった。

(注14)『W杯優勝のドイツ代表が人種差別問題?V報告会でのダンスが物議かもす』(ゲキサカ, online, 2014/7/17)などを参照。

(注15)『W杯=クロアチア監督、西村主審のPK判定を痛烈批判』(ロイターニュース, online, 2014/6/13)などを参照。

(注16)『バドミントン日本男子、韓国に敗退 空調「明らかにおかしかった」とコーチ』(The Huffington Post Japan, online, 2014/9/22)などを参照。

(注17)『またもアルジェリア戦…独代表GKノイアーにレーザーポインター』(ゲキサカ, online, 2014/7/1)などを参照。

(注18) http://news.yahoo.co.jp/staffblog/newshack/yjnews_comment.htmlを参照。

参 考 文 献

- 1) Farrington, N., et al.: Sport, racism and social media, Routledge, 2015.
- 2) Cleland, J.: Racism, football fans, and online

- message boards : How social media has added a new dimension to racist discourse in english football, *Journal of sport and social issues*, Vol.38, No.5, pp.415-431, 2014.
- 3) 河野洋・北村薫：日本におけるスポーツとレイシズムに関するウェブコメントの現状：書き込みの感情価に着目して，日本体育学会体育社会学専門領域発表論文集，No.23, pp.47-52, 2015.
 - 4) King, C. : Offside racism : Playing the white man, Berg, 2004.
 - 5) Kilvington, D. : Stamping out racism in sport means social media too, <https://theconversation.com/stamping-out-racism-in-sport-means-social-media-too-31875>, 2014. (accessed 2015-10-12).
 - 6) Martin, L.L. (ed.) : Out of bounds : Racism and the black athlete, Praeger, 2014.
 - 7) Kahn, L.M. : Discrimination in professional sports : A survey of the literature, *Industrial and labor relations review*, Vol.44, No.3, pp.395-418, 1991.
 - 8) Edgecomb, S. : Inharmonious pursuits : Performing racism at the Olympic games, *Popular entertainment studies*, Vol.2, No.2, pp.5-20, 2011.
 - 9) Arishita, M.K. : Racism in soccer : Eliminating soccer racism and using sport as a vehicle for national change, <http://oaktrust.library.tamu.edu/bitstream/handle/1969.1/148621/Arishita.pdf?sequence=1&isAllowed=y>, 2010. (accessed 2015-10-30) .
 - 10) Griggs, G. : Ethnographic study of alternative sports by alternative means : List mining as a method of data collection, *Journal of empirical research on human research ethics*, Vol.6, No.2, pp.85-91, 2011.
 - 11) 高史明：日本語 Twitter ユーザーのコリアンについての言説の計量的分析，*人文研究*，No.183, pp.131-153, 2014.